様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：６４３０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０１１８９

研究課題名（和文）ロックフェラー財団と日本統治下朝鮮・台湾における医学研究

研究課題名（英文）Rockefeller Foundation and Medical Studies in Korea and Taiwan under the Japanese Rule

研究代表者
松田　利彦（Matsuda, Toshihiko）

国際日本文化研究センター・研究部・教授

研究者番号：５０２５２４０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：日本統治下朝鮮では、米ロックフェラー財団の働きかけのもと、医学校・大学医学部改革を通じた公衆衛生改革が構想され、そのもとで公衆衛生学が形成されていく。1910年代においては、ロックフェラー財団は宣教師系私立学校であるセブランス医学専門学校への支援の可能性を考えていたが、1920年代以降は、日本植民地初の京城帝国大学の創建に着目し、初代医学部長志賀潔と接触しながら、朝鮮を日本帝国における公衆衛生改革の拠点にしうると考えるに至った。このようなロックフェラー財団のもたらした実際の改革、水島治夫のアメリカ派遣、そしてその遺産を戦後日本と韓国にまで射程を伸ばしながら検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本と朝鮮における近代的学問の形成過程は複雑に絡みあっており、日韓の医学史の議論も今なおかみ合っていない。
本研究は、日本統治下の朝鮮において、朝鮮人・日本人医学者がともにアメリカ医学の導入を構想してロックフェラー財団に援助を求めた事実を発掘し、その歴史的意味を考察した。これを通じて、植民地朝鮮の近代医学の形成において、日本からの影響のみならずアメリカの影響をも考慮すべきこと、しかし同時に、植民地の「学知」の世界においては民族的対立構造が厳存しており、戦後における学知の遺産の問題とも関わっていることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Public health as an academic discipline was introduced into colonial Korea from the 1920s to the 1930s mainly by three medical researchers.The starting point was Kim Changsei, who established a course in Public Health in Severance Medical School. Shiga Kiyoshi, a famous bacteriologist who came to know Kim, expanded his idea to establish Medical School in Keijo Imperial University as a base for public health in Korea with the financial assistance of the Rockefeller Foundation. His idea was realized when he sent Mizushima Haruo, a young public health researcher of Keijo Imperial University to Johns Hopkins School of Hygiene and Public Health.
However, even if Korean and Japanese medical scientists tried to share the knowledge of public health based on American-style medical science, the genealogy of public health in Keijo Imperial University was not inherited by Koreans after liberation, which offers a stark contrast to post-war Japan.

研究分野：植民地朝鮮研究、医学史

キーワード：ロックフェラー財団　志賀潔　金昌世　水島治夫　京城帝国大学　公衆衛生学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究「ロックフェラー財団と日本統治下朝鮮・台湾における医学研究」に関連する、研究代表者・松田利彦のこれまでの研究は、次の 3 つの分野からなる。

第一は、朝鮮における「学知」の研究である。研究代表者は、科学研究費助成事業基盤研究（A）「植民地大学の総合的研究」（2009～11 年度）（代表：酒井哲哉）に参加し、酒井哲哉・松田利彦編『帝国日本と植民地大学』（ゆまに書房、2014 年）では、特に同大学の設立構想について論じた。さらに、科学研究費助成事業基盤研究（C）「日本統治期朝鮮の医療政策と医学者」（2014～16 年度。代表：松田利彦）を通じて、同大学初代医学部長だった志賀潔の朝鮮での医学研究に着目するにいたった（「志賀潔と植民地朝鮮」（『翰林日本学』第 25 輯、2014 年 12 月）。志賀は、ロックフェラー財団と朝鮮総督府の交渉の中心となった人物であり、本研究も直接的には志賀の行跡をたどる研究の一環として構想された。

第二は、朝鮮植民地警察についての研究である。研究代表者は、著書『日本の朝鮮植民地支配と警察―1905～1945 年』（『日本の朝鮮植民地支配と警察―1905～1945 年』（単著、校倉書房、2009 年）を通じ、日本統治下の朝鮮における警察制度について研究を行い、警察の管掌した衛生事業についても検討を加えた。

第三に、植民地朝鮮と台湾の「相互参照」を試みた研究である。研究代表者は、これまで国際日本文化研究センターで共同研究「日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚」（2004～06 年）、「植民地帝国日本における支配と地域社会」（2008～11 年度）、「植民地帝国日本における知と権力」（2013 年～16 年度）を組織してきた（成果出版として松田利彦・やまだあつし共編著『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』思文閣出版、2009 年、松田利彦・陳姃湲共編著『地域社会から見る帝国日本と植民地―朝鮮・台湾・満洲』思文閣出版、2013 年、松田利彦編『植民地帝国日本における知と権力』思文閣出版、2019 年）。そこで一貫して追究してきたのは、朝鮮史・台湾史研究の視角の差異を明確化することで双方の研究の欠落部分を補完しようとする「相互参照」という考え方である。本研究でも、京城帝国大学と台北帝国大学におけるアメリカ医学のプレゼンス、戦後韓国と台湾における植民地医学の影響など、台湾と朝鮮の「相互参照」によって見えてくる差異は多いと考えた。

以上のような背景のもと、ロックフェラー財団の公衆衛生改革事業がどのように日本人・朝鮮人医学者の構想と絡まり合いながら、日本植民地に公衆衛生学という学問を生み出していったのかを研究しようと考えるに至った。

２．研究の目的

本研究「ロックフェラー財団と日本統治下朝鮮・台湾における医学」は、広い文脈でいえば、近代東アジア世界が欧米の学問的知識をどのように導入しようとしたか、そこに植民地支配の中で形成された支配民族と被支配民族の関係がどのように反映していたかを考察する研究である。

日本と朝鮮における近代的学問の形成過程は複雑に絡みあっており、日韓の医学史の議論は今なおかみ合っていない。すなわち、日本では、朝鮮における知識体系や高等教育システムが戦前の植民地支配のもとで産みだされたことを強調しがちである。他方、韓国の研究者は、それを否定するために、日本のドイツ医学と韓国・朝鮮のアメリカ医学を別々の根源に由来する学問とみなす傾向が強い。しかし、どちらの評価も歴史的に見ると一面的な狭小性を免れない。この問題を探究するために、本研究は、日本統治下の朝鮮において朝鮮人・日本人を問わず医学者の中にアメリカ医学の導入を構想する勢力があり、ロックフェラー財団に援助を求めた事実を発掘し、その歴史的意味を考察する。1910 年代より北米系宣教師の創設したセブランス医学校は、ロックフェラー財団の援助を求めていたが、1926 年に官立の京城帝国大学医学部が生まれたことで、両者の植民地医学教育・医療衛生に対する改革構想は競合することになる。この問題に着目する理由は 3 つある。

第一に、日本統治期朝鮮におけるアメリカ医学への転換を図ろうとする動きを跡づけることで、従来知られていなかった植民地の学知の一面を照らしだすことができる。すなわち、日本統治下の朝鮮において近代医学の導入がどのように進められたかを、日本―朝鮮という二項対立の枠組で考えるのでなく、近代医学の源泉だった欧米―特にアメリカ―の医学の影響を視野に入れることで、新たな視角から眺望できるようになるだろう。

第二に、朝鮮人と日本人医学者それぞれの医療衛生を通じた朝鮮社会改造構想を明らかにする。ロックフェラー財団と接触しアメリカ式医学を導入する動きは、宣教師系私立医学校のセブランス医学専門学校のアメリカ人・朝鮮人医学者と京城帝国大学医学部の日本人医学者の双方によって担われていたからである。ロックフェラー財団との関係が深かった医学者・研究者として、本研究でとりあげた金昌世・志賀潔・水島治夫らは、いずれもアメリカ医学の中でもとりわけ公衆衛生学に着目していた。社会への働きかけを志向した公衆衛生学を通じた彼らの植民地社会の改革構想に、国家・民族をめぐる深部での願望や葛藤を見出すことができると考えている。

第一と第二の論点を通じて、植民地朝鮮の近代医学の形成において、日本からの影響のみならずアメリカの影響をも考慮すべきこと、しかし同時に、植民地の「学知」の世界において民

族的対立構造が厳存していたことを明らかにすることが本研究の基本的な意義となる。
　最後に第三点として、植民地医学が戦後に残した影響を、日本・韓国・台湾について比較史的観点から検討する。参照対象として取りあげる台湾では、台北帝国大学医学部の創設が 1936 年と遅れたこともあり、アメリカ医学の本格的導入は光復後の国民党政権を待たねばならなかった。しかし戦後韓国でも、京城帝国大学出身の公衆衛生学者が米軍政によって排除されたように、植民地期のアメリカ医学が必ずしも継承されたわけではない。京城帝国大学で形成されつつあったアメリカ医学は、九州大学医学部に戻った水島治夫などを媒介に戦後日本でむしろ継承された可能性も否定できない。このように本研究は、植民地の学知の遺産についての比較研究という問題も射程に入れている。

３．研究の方法
（１）先行研究の整理：初年度を中心に本研究関連の基礎文献や公刊史料を購入し先行研究を整理すると共に、本研究全体を貫く分析枠組みを探索する。
（２）国内外の史料調査の実施：国内の史料調査については、京都で、京都大学附属図書館、府立医科大学図書館、京都大学人文科学研究所図書室および国際日本文化研究センターが所蔵する新聞・雑誌類の調査を行った。東京等では未公開一次史料の調査を国立国会図書館憲政資料室、国立公文書館所蔵の公文書、東京大学医学図書館、東北大学、茨城歴史館、九州大学等で行った。加えて、個人所蔵の文書については、所蔵者と直接コンタクトをとり、利用の許可を得た。国外の史料調査は、米国、ドイツ、カナダ、韓国、台湾で実施した。
（３）研究成果の公表：日本・韓国・台湾で成果を口頭発表及び学術論文の形で発表した。

４．研究成果
(1)　2017 年度： Bochum Korean Studies Lecture Series の一環として、本研究の成果、「Kiyoshi Shiga as a Medical Scholar and PublicHealth Reform in Colonial Korea（医学者志賀潔と植民地朝鮮における医療改革）」(East Asian Department, Ruhl Universtet Bochum(Bochum, ドイツ)の発表を行った。
　このほか、関連成果発表として、2017 年 10 月に、国際研究集会「植民地帝国日本における知と権力」を国際日本文化研究センター（京都市）にて企画・開催した。同月、天津賽象酒店（中華人民共和国天津市）にて「日本における「国際日本研究」」（東アジア日本研究者協議会第 2 回大会)、同年 12 月に慶熙大学校文科大学（ソウル市）で「日本における'帝国史'研究の現況と課題［発表原タイトル及び発表言語は韓国語］」などを行った。また、『なぜ国際日本研究なのか』（晃洋書房、2018 年 3 月）を編纂した。
　資料調査としては、2017 年 11 月ドイツに出張し、プロイセン文書館、森鴎外記念館、ボッフム大学図書館、シュパイアーハウス、フランクフルト市史研究所、ハイデルベルグ大学文書館などで、日本人医学者のドイツ留学記録、志賀潔のドイツでの発表論文などの資料調査を行った。このほか、海外では、国家図書館、国立台湾図書館、中央研究院台湾史研究所（以上、台湾。2017 年 4 月)、韓国国会図書館、国立中央図書館、ソウル大学校中央図書館（以上、韓国。2017 年 6 月、12 月)、国内では、順天堂大学日本医学教育歴史館、東京大学総合図書館、国会図書館、国文学研究資料館、茨城県歴史館、藤浪鑑史跡、京都大学人文科学研究所、京都府立医科大学などで調査を行った。
(2)　2018 年度：　松田編『(国際研究集会報告書)植民地帝国日本における知と権力』（国際日本文化研究センター、2018 年)、松田編『植民地帝国日本における知と権力』（思文閣出版、2019 年）の刊行を果たした。同書では「「知と権力」から見た植民地帝国―朝鮮史研究における成果と課題」を通じ植民地帝国日本における知と権力の問題群を編者なりに提示することにつとめ、本研究課題の一応の到達点として「志賀潔とロックフェラー財団―京城帝国大学医学部長時代の植民地朝鮮の医療衛生改革構想を中心に」を発表した。
　関連論文として、「統治機構と官僚・警察・軍隊」（日本植民地研究会編『日本植民地研究の論点』岩波書店)、「戦時期植民地朝鮮における防空体制の形成―警防団を中心に」(『歴史評論』第 820 号)、「‘武断統治期’朝鮮の憲兵警察と衛生行政―衛生組合を中心に［原論文は韓国語］」（韓国歴史研究会 3･1 運動 100 周年企画委員会編『3･1 運動 100 周年叢書』第 3 巻、ヒューマニスト）を公刊した。また「植民地朝鮮における東京帝国大学の学知―服部宇之吉と京城帝国大学の創設をめぐって」（東京大学 GJS「東京学派」研究第１回ワークショップ、東京大学東洋文化研究所）ほかの口頭発表を行った。
　本年度の資料調査では、アメリカ西海岸（カリフォルニア大学バークレー校 C.V.Starr Library、スタンフォード大学フーバー研究所、ミネソタ大学図書館など）で、ロックフェラー財団理事および京城帝国大学関係者の関連記録などの調査を行った。トロントのカナダ合同教会アーカイブズで、北米宣教師の書簡を調査した。このほか、海外では韓医学博物館、韓国国会図書館、国立中央図書館（以上、韓国。2018 年 4 月、6 月、12 月)、国内では、防衛省戦史資料室、岩手医科大学、野口英世記念館、東京大学明治新聞雑誌文庫、東北大学医学図書館などで調査を行った。
(3)　2019 年度：成果発表としては、韓国及び台湾で「京城帝国大学の創設と服部宇之吉」（翰

林大学校日本学研究所・専門家懇談会、2019 年 9 月）および「植民地朝鮮における公衆衛生学の形成」（東アジア日本研究者協議会第 4 回大会、2019 年 11 月）の口頭発表を行い、日本植民地最初の帝国大学だった京城帝国大学の創立過程と公衆衛生学研究を特に世界的な医学研究の動向と絡めながら論じた。「朝鮮における植民地警察の形成と売買春管理制度」（アクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」、2019 年 9 月）は韓国併合前後の朝鮮における衛生警察の形成と売買春管理を検討した。

関連研究として、「震災と外国人マイノリティー」（坪井秀人・シュティフィ・リヒター・マーティン・ロート編『世界のなかの<ポスト 3・11>』新曜社、2019 年 3 月）、「朝鮮総督在任期における南次郎の陸軍統制構想と対外戦略構想」（『二十世紀研究』第 20 号、2019 年 12 月）を論文として公刊した。アメリカで、「Retranslating Japanese Expansionist Ideology: Koreans who participated in the Toa Renmei (East Asian League) movement during the War」（シンポジウム On the Heritage of Postcolonial Studies:Translation of the Untranslatable、2020 年 2 月）の口頭発表も行った。

資料調査は、国外では延世大学校・ソウル大学校・光州エビソン記念館・白凡金九記念館（以上、韓国）、国家図書館・マカイ資料館（以上、台湾）、コロンビア大学・徐載弼記念館（以上、アメリカ合衆国）、日本国内では、国会図書館・京都大学等で行った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 松田利彦	４．巻 820
２．論文標題 戦時期植民地朝鮮における防空体制の形成―警防団を中心に	５．発行年 2018年
３．雑誌名 歴史評論	６．最初と最後の頁 46～58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松田利彦	４．巻 0
２．論文標題 「統治機構と官僚・警察・軍隊」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本植民地研究会編『日本植民地研究の論点』岩波書店	６．最初と最後の頁 13～22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松田利彦	４．巻 3
２．論文標題 ‘武断統治期’朝鮮における憲兵警察と衛生行政―衛生組合を中心に（原題：韓国語）	５．発行年 2019年
３．雑誌名 韓国歴史研究会3･1運動100周年企画委員会編『3･1運動100周年叢書』第3巻（権力と政治）ヒューマニスト	６．最初と最後の頁 103～143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松田利彦	４．巻 -
２．論文標題 震災と外国人マイノリティー―阪神淡路大震災と東日本大震災を比較して	５．発行年 2019年
３．雑誌名 坪井秀人・シュティフィ･リヒター・マーティン･ロート編『世界のなかの<ポスト3･11> ヨーロッパと日本の対話』新曜社	６．最初と最後の頁 121～138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松田利彦	４．巻 第3358号
２．論文標題 ［書評］荻野富士夫『日本憲兵史―思想憲兵と野戦憲兵』（日本経済評論社、2018年）	５．発行年 2018年
３．雑誌名 図書新聞	６．最初と最後の頁 4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松田利彦	４．巻 664
２．論文標題 書評：加藤圭木『植民地期朝鮮の地方変容―日本の大陸進出と咸鏡北道』（吉川弘文館、2017年）」	５．発行年 2017年
３．雑誌名 『日本史研究』	６．最初と最後の頁 126～131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　4件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 松田利彦
２．発表標題 植民地期韓国史研究と「帝国史」―現況と課題
３．学会等名 漢陽大学校日本学国際比較研究所主催国際シンポジウム「韓国における日本研究と日本における韓国研究」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 松田利彦
２．発表標題 植民地朝鮮における東京帝国大学の学知―服部宇之吉と京城帝国大学の創設をめぐって
３．学会等名 東京大学GJS「東京学派」研究第１回ワークショップ「アジアの概念化」（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 松田利彦
２．発表標題 日文研の共同研究
３．学会等名 東アジア日本研究者協議会第3回国際大会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 松田利彦
２．発表標題 空襲の記憶―日本と朝鮮
３．学会等名 総合研究大学院大学「総研大文化フォーラム2019―知をわかち、ひとをつなぐ ― 研究成果の共有と還元」
４．発表年 2018年

１．発表者名 松田利彦(MATSUDA Toshihiko)
２．発表標題 Earthquakes and Foreign Minorities― A Comparison of the Great Hanshin-Awaji and Great East Japan Earthquakes
３．学会等名 Bibliotheca Albertina, Universitatsbibliothek Leipzig（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 松田利彦(MATSUDA Toshihiko)
２．発表標題 Kiyoshi Shiga as a Medical Scholar and Public Health Reform in Colonial Korea
３．学会等名 Bochum Korean Studies Lecture Series（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 松田利彦
２．発表標題 日本における'帝国史'研究の現況と課題（原タイトル・発表言語：韓国語）
３．学会等名 慶熙大学校文科大学史学科特講
４．発表年 2017年

１．発表者名 松田利彦
２．発表標題 「朝鮮総督府官僚と「文化政治」」
３．学会等名 大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター（CAPP）主催「市民アカデミア2017」
４．発表年 2017年

〔図書〕　計4件

１．著者名 松田利彦	４．発行年 2018年
２．出版社 国際日本文化研究センター	５．総ページ数 46
３．書名 (第51回 国際研究集会報告書)植民地帝国日本における知と権力	

１．著者名 松田利彦	４．発行年 2019年
２．出版社 思文閣出版	５．総ページ数 980
３．書名 植民地帝国日本における知と権力	

１．著者名 坪井秀人・白石恵理・小田龍哉編	４．発行年 2019年
２．出版社 晃洋書房	５．総ページ数 196
３．書名 日本研究をひらく 「国際日本研究」コンソーシアム記録集2018	

１．著者名 松田利彦・磯前順一・榎本渉・前川志織・吉江弘和編	４．発行年 2018年
２．出版社 晃洋書房	５．総ページ数 151
３．書名 『なぜ国際日本研究なのか』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

国際日本文化研究センター・研究部・松田利彦
http://research.nichibun.ac.jp/ja/researcher/staff/s026/index.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考